

地球

恒星の光の届かぬ側となった私たちの星の
黒い球にちかちかと瞬く都市の光
その光の粒のひとつの中に私はうずくまっている

スケートボードに乗って
バランスを保った人々が私を追い抜いてゆく

目を射るフラッシュの閃光が
私を次々に襲い、立て、立てと命令する

立ち止まることを許さぬ世界が扉をがんと叩く
前へ、未来へ、と、がなりたてる

何重に鍵をかけても押し寄せてくる
情報、メディア、号令、怒声、哄笑

電子の速度を借りたシステムが活動を強いる
スピーディーにかつ正確に、と肩を静かにたたく

そのふたつを手なずけられる者たちだけが
顔を上げて通りを歩くことができるのだ

彼らは追いかける
更なる速さを、光速を手なずけることを

私はうずくまっている
この星はいずれ気が狂うだろう
そのとき、私は顔を上げるのだ

(2005.4.9)